

名古屋市政の近況～市長が交代して迎えた新年度

開催日：2025年4月22日 開催場所：ホテルオークラレストラン 14F

弊社主催の異業種交流会「東海財界倶楽部例会」が4月22日、名古屋市東区東桜のホテルオークラレストランで開催された。例会は今年2回目で、通算63回目。講師は名古屋市議会議員のはっとり将也氏。はっとり氏は愛知高等学校、国学院大学を卒業、財団職員、市議秘書を経て、1999年（平成11年）に初当選以来、連続して7回当選。この日、はっとり氏は『名古屋市政の近況～市長が交代して迎えた新年度』と題し私見を交えながら語った。



名古屋市議会議員 はっとり 将也 氏

まず、広沢市長の人柄をはっとり氏の主観としながら「穏やかなビジネスマンタイプ」と述べ、また「肯定的な評価をする声が多数」というのは前任市長（河村たかし氏）のおかげではないかとジョークを交えて語った。

実際に広沢市長と常任委員会で直接議論した印象として「正面から質問に答える姿勢に誠実さを感じている」と言いながらも、「河村さんに言われたから、促されたから云々という発言」があったことには違和感を感じ、今後も引き続き広沢市長の言動を注視したいと語った。

次にはっとり氏は15年に及ぶ河村前市長の名古屋市政の総括として「市民税の低率減税」、「名古屋城天守閣木造再建構想」、「公務員・議員バッシング」などを挙げた。

はじめに「天守閣の木造再建」については国や文化庁との調整がうまくいってないため、購入した木材の保管費用は年間億単位となっていることの問題提起をしながら、国会議員になった河村氏が広沢市長の後押しをすべきとの見解を述べる。また、「天守閣の木造再建」は私見として「10年前に大改修を終えた姫路城に集結した宮大工技術の後継者を後世に残すためのチャンス」であるとし、「自民、民主、公明の賛成で再建予算が可決し、議会としても認めた」事案なので「広く市民の理解と納得が得られるよう、広沢市長は決着をつけるために動かなければならない」と語った。

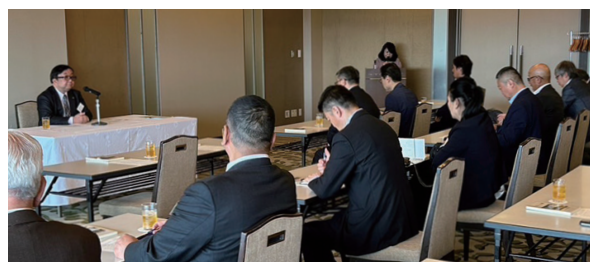
次に「公務員バッシング」については河村前市長が公務の必要性、重要性を肯定しているにも関わらず、自らの公務と思えぬもの（自分の曲の発売）を公務と発言していたことに疑問視。それに対し市職員には「公務員は極楽、税で食う奴が楽するのはけしからんという言葉で辛く当たっていたことは罪深い」と述べた。

「公務員の現状」に関しては配布済み資料で解説。全地方公務員数は「昭和の終わりから平成の前半にかけて、行財政改革イコール職員の定員削減と

いう時代が続いたが、ここ数年は増加傾向」であること。その内容として、2005年を基準に総務一般（管理部門）は、全国では一割以上減らした後に、少し戻している。それに対して防災は約20倍（名古屋市は5倍）で、平成期の自然災害の影響大。さらに、福祉事務所については時代の変化とともに複雑化、多様化、あるいは複合化している状況を色濃く反映し、減らすことなく約1.5倍（名古屋市は1.7倍）に。さらに近年は若年職員の離職が増加、名古屋市も同様の傾向にあるため自治体として人材確保や業務の効率化などの変革の必要性を訴えた。

最後に「減税」について。「減税の効果と、その減税の結果、カットせざるを得ない施策のバランスをしっかりと伝えなければならない」とし、広沢市長の課題として、来年度の「減税率を5%から10%に拡大」とする公約を目指すことになるが、そのための「行政改革推進プロジェクトチームを庁内に発足」させた。

市政の今後の展望、課題として広沢市長には「嫌われる勇気を持つ」ことを願い、「時代の変化とともにニーズは変わっていきます。それに合わせて市政のあり方は当然、変化させていかなければなりません。どの施策が時代に合わなくなったか、あるいは、今の時代、これからの時代、どういった施策が求められるのか、いつも敏感に情報をキャッチし、行政、職員は現場の状況を熟知し、最終的には政治家が責任をもって変えていかなければならないと思っています」と締めくくった。



講演中、はっとり氏の話しに耳を傾ける参加者の皆さん